
水瀬堀の美人柳

ろく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水瀬堀の美人柳

【Nコード】

N9523V

【作者名】

ろく

【あらすじ】

颯馬は水瀬堀の美人柳を目指し、ひた歩く。

やがて辿りついた先で出会ったのは、庭師を名乗る男だった。

『手前は庭師でございやすよ。——ちよいとばかり、いかれた、ね』

夕暮れ時であつた。

空の端で輝く残照も、そろそろ夜に吞まれようとしている。

黄昏時である。すれ違う人々の顔はぼんやりと影に覆われており、
颯馬そしまの目には黒の塊が着物を着て蠢いているように映った。

足元は昨日の夜雨の所為でぬかるんでおり、一步踏み出すたびに、
ぐじゅりと嫌な音を立てる。跳ねる泥が薄物の裾に飛び、颯馬は眉
を顰めた。

この男、美しもの好きなのである。

ゆえに、己の身形にも気を使う。月代を綺麗に剃り上げ、鬚も銀
杏頭に結い上げて、薄萌黄の薄物を着流す姿は粋そのものだ。

だが今はその粋ぶりも、汗と泥とで崩れてしまっていた。

文月の生ぬるい風が肌を撫でた。まとわりつくような湿気が薄物
の隙間から入り込み、じわじわと不快な汗を滲ませる。

闇に薄らばける視界、ぬかるむ足元、からみつく湿気。不快でた
まらぬというのに颯馬が外に行くのは、やはりこの男が美しもの好
きであるゆえだ。

颯馬は水瀬堀みなせぼりの美人柳を目指し、ひた歩いていた。

水瀬堀は、颯馬の住まう徒歩かちこうじま町より二里。遠くはないが、近く
もない。それでも、颯馬はこの柳を見たかった。

美人柳が有名になったのは、文月になってからの事だ。水無月の
続き雨を経て、美人柳はその緑をより一層深め揺らぎ、人を誘うよ
うになった。

やがて、美人柳の在る河原に辿りついた。その頃には息は上がり、
鬢もほつれ、薄萌黄の薄物の裾は泥で汚れきっていた。

だが颯馬は気にしていなかった。颯馬は昂る心を抑えながら、美
人柳の側に向かった。

柳は河原に君臨している。まさしく君臨というにふさわしい姿だ。

黄昏時の薄闇を背負い、その見事な枝葉をさやさやと風に揺らしている。

さ。

さ。さ。

さ。さ。さ。

風に揺れるたび、美人柳が声をあげる。颯馬は思わず、ほう、と息を吐いた。

美人柳を見上げながら、颯馬は一步步柳に近づいていく。

ゆらめく柳を、女の髪のようなだと例える者もいる。だが颯馬は、そうは思わなかった。

さ。

さ。さ。

さ。さ。さ。

ざ。

「まるで、女の手のようにアねえですかい」

は、と颯馬は息を吞んで歩みを止めた。

美人柳の傍らに、男が立っていた。

黄昏時の薄闇に吞まれ、男の輪郭は不明瞭であった。男が黒の薄物の着流し姿であるゆえかもしれぬ。

ぼやけた印象は、目深に被った笠の所為でもあるだろう。目元は隠れ、ただ、薄らと笑う口元ばかりが見える。

男は颯馬に笑みを投げかけ、こいつア失礼、とおどけた声を出した。

「驚かせちまったようだ。許してくんなせえよ、旦那」

「いや、それは、構わぬが……」

何者だ、と颯馬が問う前に、男は言った。

「手前は庭師でございやすよ」

そしてするりと腕をあげ、長い指で己の頭部を指し示してみせる。

「——ちよいとばかり、いかれた、ね」

ニイ、と笑みを深める。

颯馬は声を呑む。庭師は、く、と喉を引き攣らせるようにして笑み声を上げた。

何やら馬鹿にされたようで面白くない。颯馬は不快さを隠そうとせず、鼻をフンと鳴らした。

庭師を名乗る男は気にした素振りも見せず、美人柳を一房手に取る。

「ねえ旦那。そうは、思いやせんかい」

何がだ、と聞こうとして、颯馬は口を噤んだ。

——女の手のようじゃアねえですかい。

庭師は、そう言ったのだ。

颯馬はただ無言で頷いた。

そうだ、手だ。この柳は女の手だ。なややかに揺らぎ、男をさしまねく。

手だ。

「美しい」

思わず、颯馬は声に出していた。

女の手は良い。美しい。

白い指先の先にちよこりと乗った、桜貝の如き爪。関節に刻み付けられた皺は生命を感じる。ほどよく乗った脂は、手の甲に浮き上がる不恰好な骨を隠してくれる。だが指を反らせるたびにちらちらと浮き上がる骨も、それはそれで良いものだ。走る血の管の青さは、手の白さをより一層深めている。ぽつぽつと見える毛穴。そこから飛び出す短い毛も、男のように黒く固くない。ひたすらなやかで、しなやかだ。手のひらについた肉もまるやかで、颯馬の手を優しく包んでくれる。

美しい手だ。

女の手は美しい。

いや、お美代の手は。

まるで、お美代の手だ。

美人柳はまるでお美代の手だ。

なやかに揺らぎ男をさしまねく。

「左様でございやすなア」

「は」

「左様でございやすなアと、申し上げたんで」

「……何の事だ」

「美しい、と仰ったじゃねえですかい」

「ああ、……………」

さ。

さ。さ。

さ。さ。さ。

美人柳が風に揺れる。

ゆらゆらと、まるで、手招きをするように。

—— 颯馬さん。

お美代は言ったのだ。

颯馬さんとは所帯を持てぬ、と。

今まで散々に尽くしてきたのだ。何度も何度も、お美代が看板娘を勤める茶屋へ足しげく通った。日照ろつが雨が降ろつが通った。毎日毎日毎日。

それも、寄っておいき、とお美代が颯馬を誘ったからだ。

白い頬にえくぼを刻んで、白い手で颯馬をさしまねき、白い手で颯馬の手を包んで、ゆっくりしておいき、と緋毛氈の椅子に座らせ

て。

だから毎日通った。通って、通って、想いを告げた。

だがあの女は困惑を滲ませた声で言ったのだ。颯馬さんとは所帯を持てない、と。

だから。

その手を。

美しい手を。

——やめて颯馬さん。

「旦那が仰る通り、大層美しゅうございやすなア。男どもが惹かれるのも無理はねえや」

「何を……」

このあばずれが。

他の男も誘ったか。

この手で誘ったのか。

俺以外に何人を誘った。

「颯馬さん」

声がした。

お美代の声だ。

美人柳の下に、お美代が立っていた。

お美代は袂を押さえ、右手をゆるりとあげた。
そして、さしまねく。

「颯馬さん」

ゆらゆらと、白い手が、黄昏時に揺れて踊る。

「お美代」

何故。

何故、お美代が。

脚が震えた。颯馬はじりじりと後ずさる。

「手前はこの柳に呼ばれたんでございやすよ」

庭師の声がした。だが姿が見当たらない。

「手前は庭師。草花で庭を彩る事が勤めでございやす」

そして、と言葉を切る。

「草と花の声を聞き、美しく咲かせる事が」

ぞ。

風が。

お美代が。

「颯馬さん」

笑うお美代が、すぐ側にいる。

「何故だ」

お美代がいるはずはないのだ。

お美代が在るはずはないのだ。

「颯馬さん」

お美代は笑いながら、白い手を揺らめかせて颯馬を誘う。

この手も、あるはずがないのだ。

それも颯馬が。

あの日、あの水無月の夜に。

お美代の手を。お美代を。

この、柳の下に。

「颯馬さん」

さしまねく手が、ぼろりと落ちた。

颯馬は悲鳴を上げる。

「颯馬さん」

落ちた手の代わりに、お美代の手から柳が生えた。
お美代は笑って、柳を風に揺らがせ、颯馬を誘う。
「うわああああッ」

叫んだ。

柳が、いや、お美代の手が、柳の姿をしたお美代の手が。
伸びて。

颯馬を絡めとる。颯馬の足を、腹を、首を、顔を絡めとる。口中
にまで柳が。

息ができない。

「颯馬さん」

許してくれお美代。

懇願する声は、口中を埋める柳に吞まれて消えた。
颯馬の視界は色濃くけぶる柳の緑一色だ。

「美しいうございやすなア」

庭師の声がした。

「——あな燦爛たるや」

謡うような、庭師の声が。

さ。

さ。さ。

さ。さ。さ。

ぞ。

風が。

柳を。

お美代を。

「颯馬さん」

お美代。

美しいな。

美しい手だ。

美しい柳だな。

まるでお前の手のように、美しい柳だな。

翌日、水瀬堀の美人柳の土の下から、男女の死体が発見された。

女は両手を斬られ、その手を男はさも大事そうに抱えていた。

柳は陽の光を受けて緑に輝き、二人を包むようにして風に泳いでいたと聞く。

その緑は、まさしく燦爛と呼ぶにふさわしい輝きであったとの事だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9523v/>

水瀬堀の美人柳

2011年11月2日03時12分発行